

[研究ノート]

異文化コミュニケーションと国際理解¹⁾

Intercultural Communication and International Understanding

八代 京子

Kyoko Yashiro

はじめに：国際化とコミュニケーション

1. 異文化コミュニケーションとは
2. 言語コミュニケーション
3. 非言語コミュニケーション
4. 価値観の多様性
5. 国際理解への態度

キーワード：地球市民、異なる文化背景、言語、非言語、価値観、態度

はじめに：国際化とコミュニケーション

国際化の進展

貿易立国の日本にとって世界の国々との平和的関係は不可欠である。国際化は物から金、金から人へと力強く進展し、世界の国々は複雑な相互依存関係にある。これからの日本は単一民族・単一言語社会から多民族・多言語社会へと進んで行く。従って、地球市民として異なる文化背景を持つ人々と共に生活し、仕事をしていくために、異文化コミュニケーション能力と国際理解力は不可欠である。

現在日本に定住または長期滞在して働く外国人は入国管理局によると、2007年末現在で215万2973人で、総人口の1.69%を占める²⁾。外国人労働者の数は2008年の金融危機とそれ以降の景気低迷で一時的に減少したが、長期的に見れば増加傾向にあることは疑う余地がない。少子高齢化が進む日本では、今後50年に看護師、介護士のほか森林保全、農業分野でも外国人の助けが必要であるとして、外国人材交流推進議員連盟では1000万人の受け入れを念頭に具体策を考えている(日経2008年5月11日)。さらに、M&Aなどによる企業の国際化は留まるところを知らない。

一方で、海外で働く日本人の数も増えている。2005年には海外の長期滞在者と永住者は100万人を突破した(外務省2007年)。在留邦人の最も多い国は米国、次い

1) 本稿は、麗澤大学経済学部国際社会コース2年次配当の「経済学基礎演習」教科書プロジェクトのために執筆したものである。

2) 入国管理局ホームページより、2009.

で中国、ブラジルである。在留邦人の最も多い都市は、ニューヨーク、ロサンゼルス、上海である。男女別在留邦人数は女性の方が男性を上回っている。向上心旺盛な女性はグラスシーリング（昇進できる限界）が低い日本を脱出し、海外でキャリアを築いている。

日本企業の海外進出、外国企業の日本上陸、M&Aによるトランスナショナル企業の増加など企業活動がグローバル化すればするほど、ボーダレス社会が加速する。そして、文化背景が異なり、習慣や常識が異なる人々と一緒に仕事をすることが日常となる。国際社会に生きる私たちには、異文化理解は必須である。従って、理解しあうために積極的にコミュニケーションを図り、辛抱強く試行錯誤を繰り返しながら理解に達するために努力する忍耐力と柔軟性を基礎とする異文化コミュニケーション能力が必要である。

全国の公立小中高校などに在籍する外国人生徒が増えている。2007年度には2万54人に達した（文科省2008年）。日本で学ぶ留学生数は11万8498人である。2008年度の海外で学ぶ日本人小中学生は6万人強、海外留学している学生数は2000年度で7万6464人であった。若者達の国際交流はますます盛んである。互いに若い頃からいろいろな文化習慣にふれることは国際的なものの見方と語学力を身に付けるのに確かに役に立つ。しかし、単に異なる文化との接触が多ければ異文化の人々を理解し、一緒にうまくやっていける能力が自然に身に付くと思うのは安易である。放っておくと異文化の人々との不愉快な体験から、ただ単に、偏見が増すだけという結果を招くこともある。例えば、海外赴任から帰国した人でも「ラテンアメリカ人は怠者だ」とか「アラブ人は正直じゃない」といった間違ったステレオタイプ化をすることがある。実際、文化背景の異なる人々と接する機会が増えれば増えるほど、誤解と摩擦の機会も増え、仕事がかどらずストレスがたまる結果になることも多い。つまり、異文化コミュニケーションがうまくできない結果、文化的多様性が創造性につながらず、否定的な態度と混乱を招いてしまうのである³⁾。

したがって、異なる文化背景の人々と共に生活していく機会が増えれば増えるほど、どのようにしたら誤解や摩擦を避け、双方に満足のいくような建設的な関係を築いていけるか知る必要がある。また、地球市民として実際にそのような関係を実現させる異文化コミュニケーション能力を身に付けなければならない。

1. 異文化コミュニケーションとは

文化とは

異なる文化背景の人とコミュニケーションするということはどういうことなのだろうか。まず、文化に焦点を当ててみよう。文化とは人間の集団が共有する目的とその目的を達成するために全員が守らなければならない規則や決まりから成っていると見える。また、その集団の歴史によって築きあげられ、継承されてきた習慣や

3) 八代京子、町恵理子、小池浩子、吉田友子『異文化トレーニングーボーダレス社会を生きる』三修社、pp. 13-14, 2009.

価値観から成っている。岡部は文化を次のように定義している。

「文化とは、ある集団のメンバーによって幾世代にも渡って獲得され蓄積された知識、経験、信念、価値観、態度、社会階層、宗教、役割、時間・空間関係、宇宙観、物質所有観といった諸相の集大成であるといえよう」⁴⁾

この定義によれば文化は主に私たちの頭の中に蓄積されている観念である。そして、私たちはこの観念に基づいて多くの物理的な物を作り出している。建築物、交通手段、衣服、料理、書籍など。これらも文化の一部である。

異文化コミュニケーションでは日常的な文化にも注目する。朝起きてから夜寝るまで、寝ている間も私たちは文化のお世話になっている。朝どのような寝具から起き出すのか。洗面はどのような場所で何を使って済ませるのか、誰にどのように朝の挨拶をするのか、朝食は誰とどこで何を食べるのか。どのような衣服を着て出かけるのか。何に乗ってどこまで行くのか。交通規則、乗車マナー、仕事のやり方、しかり方、ほめられ方、謝り方、酒の飲み方、遊び方、これら日常的なことがら全てが、異文化コミュニケーションにとって大切な手がかりを与えてくれる文化である。

これらの日常的な文化は、あまりにも身近なものであるため、常識となってしまうので、私たちはその重要性をあまり意識しなくなっている。ところが、文化背景の異なる人と生活してみると、私たちの常識が相手の常識でないことに直面する。例えば、私たちは朝、学校で友人に会うと「おはよう」と挨拶をする。しかし、アメリカでは「Good morning」では不十分である。ちゃんと相手の名前を言わなければ挨拶にならない。このような日常的な文化の違いはどんなに小さくても、それが蓄積するとストレスになり、私たちの人間関係に影響を与える。そして、それまで意識していなかった身近で日常的な文化の重要性を思い知らせてくれるのである。

いろいろな文化集団

文化は伝承されるものである。私たちは、母の胎内にいるときから、いやそれ以前の単細胞の段階から学習を開始するのかもしれない。母から学び、家族から学び、幼稚園、学校、地域社会、国家、アジア圏、国際社会と私たちをとりまく社会は拡大していき、私たちは成長するに伴い、それぞれの社会の規範を学びとっていく。つまり、それぞれの集団にその集団の文化があり、私たちはその文化を学びとることにより、その文化の成員になっていく。そして、成長するにつれ、その文化の構成員としてその文化を創造していく責任をも担う。

昨今、バブル崩壊後の日本社会の構造変化が話題になっているが、終身雇用と年功序列が少なくなり、契約雇用と年俸制が普及してきた結果、正社員という雇用形態が減少し、契約社員、派遣社員、フリーターなどが増えてきた。このような雇用形態の変化は生活基盤に大きな影響をもたらし、それぞれ新たな生活文化を形作る

4) 岡部朗一「文化とコミュニケーション」古田暁監修、石井敏、岡部朗一、久米昭元『異文化コミュニケーション』有斐閣、p. 42, 1996.

原因になっている。従来、文化集団を考えると基準として用いてきた、性別、年齢、出身地、教育背景は今でも妥当性があるが、女性文化、男性文化、若年文化、熟年文化、関西と関東の文化的違いなどに加えて、派遣社員文化、フリーター文化というものも考慮にいれなければならない時代になったといえよう⁵⁾。

さらに、私たちは、いろいろな集団に同時に所属し、同時にいろいろな文化の成員になっている。私たち一人一人が複数の文化に属しているということは、ほとんどの人とのコミュニケーションが異文化コミュニケーションの部分を含んでいるということになる。私たちが属する諸々の集団の一番外側に付け加えたいものがある。それは生き物すべてと自然現象を含めた地球世界である。私たちは長い歴史の中で人間中心の文化を築いてきたが、これからは文化と自然の共生共栄が重要である。人間は自然の一部である。この大切な事実を私たちは忘れがちではないだろうか。環境汚染、地球温暖化、未知なるウイルスや菌の繁殖など私たちの生存を脅かすこれらの現象は、私たち自らの文化活動がもたらしたものであり、私たちに自然の力を再認識させ、私たちの文化の矛盾と軽薄さを痛烈に告発してくれる。私たちが自然界と共生共栄の関係を築くのにも異文化コミュニケーションの考え方はたいへん役に立つ。

文化的違い

異文化コミュニケーションでは文化が「異なる」ということを強調しすぎて、共通点を無視している。異文化コミュニケーションが相互理解を目的とするのなら、このような視点は逆効果ではないかという意見をよく耳にする。確かに、すでに強い偏見が存在する場合などは、共通点に注目したほうが関係の改善に役立つといえる。しかし、一般的に言って、客観的に違いを知っておくことは、多様性を認める前提として必要である⁶⁾。異文化コミュニケーションでいう「違い」とは共通点を探すための検証の過程で明らかになる違いのことであり、ある文化とある文化がまったく違うというような絶対的な違いではなく、相対的な違いを対象にしている。このような違いを知った上でないと相互理解のつまずきの原因も分からないまま終わってしまう。

日本人は集団主義的であり、アメリカ人は個人主義的であると言われているが、だからといって日本人とアメリカ人は理解しあえないほど違うということではない。命を大切にしよう、約束は守ろう、うそを吐いてはならない、労働は尊い等、共有する価値観は多い。

しかし、文化による違いも明らかに存在する。たとえば、A文化のほうがB文化より集団主義的価値観を持っていたとしよう。A文化の人の中でも集団を大切にする度合いは人によってかなり違いがあるので、人々の分布は、最も多くの人々に支持される一般的な基準点を頂点として左右に裾を広げた形になると考えられ

5) 鈴木有香、八代京子、吉田友子「阿吽の呼吸が終焉する時代」『異文化間教育 29号』アカデミア出版、pp. 16-28, 2009.

6) Ting-Toomey, S. 1999. *Communicating Across Cultures*. New York: The Guilford Press.

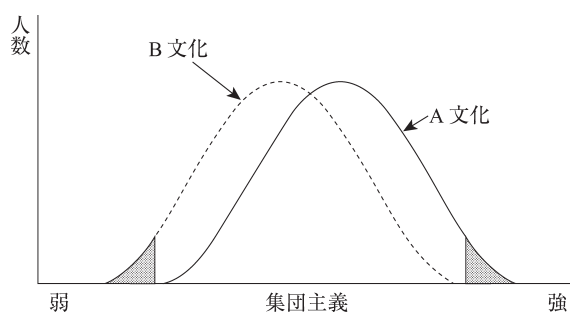


図1

る。この分布を図で示すと図1のようになる⁷⁾。

それに対して、B文化の人の分布はA文化の人の分布より頂点が左に位置するカーブを描くであろう。カーブが重なり合っている部分と重なり合わない部分があるのくらいによって、文化間の違いの度合いが分かる。私たちは、違いを意識するとき、とかく相手文化の標準よりそれた裾野の端の部分、図1で黒く塗られた部分の人々の行動を見て、相手文化をステレオタイプ化する傾向があるが、そのような見方は偏見につながるのを避けなければならない。しかし、それぞれの文化によって分布カーブの頂点が異なること、重なる部分と重ならない部分があることを認識することは大切である。本稿での文化集団とその成員の捉え方は以上の理解に基いていることを忘れてはならない。

このように、違いは相対的なものではあるが、共通の理解は努力なしには形成されにくい。人間同士であるから人間として共有する価値観は必ず存在する。しかし、安易に共通すると認識することは危険である。なぜなら、共通だとの判断を下すのが往々にして、弱い集団ではなく力のある集団だからである。弱い集団のほうで強い集団の価値が普遍的な価値であると認めたわけではなく、ただ強い集団の力に弾圧されていただけである場合が多い。国際的に経済力と技術力を蓄積してきた日本は、他の文化から学ぶものはないと早合点したり、日本文化の価値観が普遍的なものだと過信するような過ちを犯してはならない。まず、理解する努力をしよう。

(ワークシート1を用いてグループ・ワークをしよう)

2. 言語コミュニケーション

コミュニケーションはよくキャッチボールにたとえられる。話者が情報というボールを聞き手に送り、聞き手がそれを受け取る。実は、コミュニケーションはそう

7) Guy, V. & Mattock, 1995. *The International Business Book*. Lincolnwood: NTC Business Books. pp. 8-10.

Trompenaars, F. 1993. *Riding the Waves of Culture*. London: The Economist Books. pp. 26-28.

簡単ではない。特に、話者と聞き手の文化背景が異なる場合はより複雑なプロセスとなる。例えば、使うことばが異なるかもしれない。たとえ同じことばを使っているとしても、話者にとっては母語でも聞き手にとっては外国語かもしれない。ということは、聞き手の語学力によって、理解の度合いが違ってくる。その上、ことばの意味の部分にかなりのずれが生じる可能性が大である。さらに、表現の仕方でも何を伝えようとしたかが正確に理解されない可能性もある。

ここでは、日本語母語話者が英語母語話者であるアメリカ人で、まだ日本語が堪能でない人に日本語で話している場合を考察してみよう。日本語には同音異義語が多いので、外国人は混乱するが多い。

たとえば、相違、創意、総意、僧衣、はいずれも「そうい」と発音されるが意味が異なる。日本語が堪能な外国人なら文脈から正しい意味を選択することができるが、そうでない場合は誤解してしまうかもしれない。

次の例は、抑揚が意味の違いをもたらすものである。

アメリカ人：明日、電話しましょうか。

日本人：いいよ。（「いい」を強く言う。しなくてもいいという意味）

アメリカ人は日本人の「いいよ」を good または okay と解釈して、自分の提案が肯定されたと思ってしまうかもしれない。

次の例は単語の意味に関係する。

日本人：それ、違わない？（ちょっとおかしい、よくないという意味）

アメリカ人：そうですね。とても個性的です！（違っていて個性的でよいという意味にとってしまった）

「違う」という日本語は「間違い」と近い意味で用いられることが多いが、「違い」=difference と学んだアメリカ人は wrong という否定的な意味として解釈しない。

次の例は表現方法の違いから生じる誤解である。

日本人：忙しいの分かっているけど、今度の土曜日、たいしたことできないけど、家で簡単な食事でもどう。いや、急な話で申し訳ないけど。

アメリカ人：ああ、そうですか。そうですね。すみませんが、忙しいです。

この会話では、日本人は一生懸命もてなす予定であるにも関わらず、遠慮がちに誘っている。この遠慮がちな表現が、アメリカ人にはいやいや誘っている、積極的に来てもらいたいと思っていないと解釈されてしまうのだ。

人を招待する場合、アメリカ人は We'd like you to come. I'm sure you'll enjoy meeting all the people. We are going to have lots of good food and wine……と積極的に誘うのが常識的なやり方である。

日本人同士でも関西と関東ではことばの違いがある。関西人は、「あほ」と言われても怒らないが「馬鹿」と言われると怒る。関東人は「馬鹿」と言われても怒らないが、「あほ」と言われると怒る。方言による違いが元で、理解できなかったり、誤解が生じることはよくある。

また、最近は、ことばの使い方の世代差でショックを受けたという経験をよく聞く。特に、職場で新入社員の女性が自分のことを「あけみ、今日、携帯忘れちゃった」と自分の名を用いて、幼児的であると年長者から批判されたりする。また、中学生の女子同士が「おれ、腹へったあ」など男ことばを使っているのに眉をひそめる大人たちもいる。

さらに、話し方の違いが誤解の原因になることもある。文化によって、規範とされる話方、コミュニケーション・スタイルは異なる。ここでは、言語使用に表れる4つのコミュニケーション・スタイルを対にして取り上げて、その背後にある価値観を考えてみよう。

らせん的スタイルと直線的スタイル⁸⁾

らせん的コミュニケーション・スタイルとは、自分の主張や意見を明確に言語化しないで、相手にいろいろと状況を説明し気持ちを伝えながら、相手が結論を推察してくれることを期待する表現方法であり最後まで結論を言わないスタイルである。直線的なコミュニケーション・スタイルとは自分の主張や意見を簡潔に表現し、次にその主張や意見の背後にある理由を論理的に説明し、相手の理解と同調を求める表現方法である。まず結論を言ってから、裏付けを加えるスタイルである。

らせん的スタイルと直線的スタイルを並列すると、その違いがよく分かる。「今夜、一緒に飲みに行こう」という誘いに対して、

らせん的返答：いいねえ。ここんところ忙しくて飲みに行っていないなあ。今日も、仕事がたまっていて、残業だよ。何時になるか分からない。まったくまいっちゃう。

直線的返答：いやあ、残念だけどダメなんだ。残業で何時に終わるか分からない。まったくまいっちゃう。

日本人ならどちらの答え方でも断っていることは直ぐに分かる。しかし、直線的なコミュニケーション・スタイルを用いる人だと、らせん的な答えに対しては納得できなくて、さらなる誘いをかけてくる。「残業がいやなら、明日に廻せばいいだろう。今夜は息抜きが必要だよ」などと、こちらの気持ちを読み違えて反応してくる。相手は主語（主語）が明確な断りのことばを表明しないかぎり納得できない気分なのである。

国際化が進む中、日本人の曖昧なコミュニケーション・スタイルを改め、論理的で明確なコミュニケーション・スタイルを習得すべきであるという意見をよく聞く。これからのビジネスマンは、はっきりと意見を述べ、論理的に説明できるようにならねばならないとされる。らせん的なコミュニケーション・スタイルが日本で用いられるのは、それが日本の風土や人間関係のあり方に調和しているからである。日本人同士がコミュニケーションするときにはこのスタイルが良いのであるが、相手が文化背景の異なる人である場合は、らせん的スタイルでは真意がなかな

8) Ishii, S. 1985. "Thought Patterns as Modes of Rhetoric: United States and Japan" Samover and Porter. *Intercultural Communication: A Reader*. Belmont: Wadsworth.

か伝わらない。それぞれのスタイルには優劣があるわけではなく、相手と目的に応じてコミュニケーション・スタイルを使い分けなければならないということである。

飛び石的スタイルと石畳的スタイル⁹⁾

飛び石的スタイルでは、伝達される情報の内でことばにしなければならない部分だけがことばで表明され、状況で理解される部分は言語化されない。つまり、それまで共有された体験や場面、状況に多くの意味が含まれており、あえてことばで表現しなくても分かりあえることが前提である。したがって、話し手は分かりあえるための必要最低限のことばで済ませ、聞き手は話し手の本意を察しなければならない。

石畳的なスタイルでは、ことばをつくして克明かつ正確に情報を伝達する。さらに、誤解を避けるために余計な情報は伝えない。これらのことがらは、話し手の責任においてなされる。これは、正確にことばで説明しないと誤解を招きかねないと思われるから用いるスタイルである。話者と聞き手の間に共有されているものが少ないときは、このスタイルが有効である。

飛び石的スタイル

A：昨日の林商事の件、どうだった。

B：うまく行きました。

石畳的スタイル

A：昨日話しあった林商事とのフィルム納期の件、こちらの要望を聞いてもらえたかね。

B：ええ。納期をこちらの要望どおり九月二〇日で約束を取り付けました。

文書にして確認します。

ホールはこのようなスタイルの違いは、高コンテクスト文化か低コンテクスト文化の違いによって生じると言っている¹⁰⁾。高コンテクスト文化とは、話されることばよりも場面、状況に情報が内在している文化である。高コンテクスト文化では飛び石的スタイルで十分話が通じる。これに対して、低コンテクスト文化では、場面、状況よりもことばに情報が内在しているので石畳的なスタイルが用いられる。一般に、高コンテクスト文化は、特定の地域に一つの民族が長年生活を営んでいると形成されるのに対して、低コンテクスト文化は、人々の移動が激しい多民族多言語の地域に形成される。これは、高コンテクスト文化ではものの見方や価値観、常識、行動様式が均等化しているので、ことばによる説明がそれほど必要ないからである。ホールによると、日本を含む多くのアジア文化は高コンテクスト文化、北欧・ドイツ・アメリカ文化は低コンテクスト文化であると言われる。しかしながら、同じアメリカ文化でも、家庭文化と会社文化では家庭文化のほうが一般に高コ

9) 八代京子、町恵理子、小池浩子、吉田友子『異文化トレーニング—ボーダレス社会を生きる』三修社、pp. 84-86, 2009.

Barnlund, D. 1989. *Communicative Styles of Japanese and Americans*. Belmont: Wadsworth.

10) Hall, E. 1976. *Beyond Cultures*. New York: Doubleday and Company.

ンテキストだと考えられる。また、同じ会社文化の中でも、自分が日常接している部署は高コンテキストであり、他の部署の業務に関しては低コンテキストであると言える。

(ワークシート2を用いて、グループ・ワークをしよう)

3. 非言語コミュニケーション

「ほんとうにごめんなさい。申し訳ありません」と何回も謝られても、どうも心がこもっていないと感じたことはないだろうか。心がこもっているかないかを私たちは何で判断しているのだろうか。そのときのその人の表情や体の動かし方、声の調子や対人距離から推し量るその人の真剣さや誠意などから判断していると思われる。ことばとこれらのことば以外のものから伝わってくるメッセージが一致しないとき、私たちはことば以外からくるメッセージの方を信用する。つまり、ことばは本心を表していないと判断する。これは、人間に普遍的に見られる現象だ。私たちにとって、ことば以外から伝わるメッセージは非常にインパクトが強いのである。

コミュニケーション学者のバードウィステルや心理学者のマレービアンの研究によるとコミュニケーションの約90%から65%は非言語によって担われている¹¹⁾。確かに、初対面のとき私たちは相手の印象を非言語的の手がかりから形成していると思われる。知り合いになってからも、非言語的の手がかりは重要な役を担っている。したがって、コミュニケーションを図るときは、ことばだけに頼るのではなく、非言語にも十分配慮する必要がある。特に、誤解を避け信頼感や安心感を育むためには非言語とことばが一致したメッセージを伝えなければならない。

非言語コミュニケーションには以下のものが含まれる。表情、アイコンタクト、ジェスチャー、姿勢、体の動きなどは「身体動作」という範疇に、体臭、口臭、皮膚の色などは「身体特徴」に、対人距離、縄張りなどは「空間の使い方」に、撫でる、たたく、抱く、手を握るなどは「接触行動」に、声の高低、かすれやなめらかさ、体調や感情から出る音などは「準言語」に、衣服、持ち物、化粧や香水などは「人口品」に、建物、室内装飾や照明、家具の色、室内の温度や音などは「環境要素」に、予約、約束の時間、時間を守ることや遅れ、スケジュールなどは「時間の使い方」に含まれる¹²⁾。このように見てくると、非言語要素がいかに多様であるか、また、これだけ多くの要素が形成する場(コンテキスト)の中でことばがコミュニケーションに使われていることに気付く。

ここで、欧米人に誤解されやすい日本人の非言語コミュニケーションの例を紹介する。表情では日本人の「なぞの微笑み」がある。地震とか水害にあった被害者がテレビのインタビューに応じて「どうしたらいいか分からないほど困っています」と言いながら、口元はかすかに微笑んでいるようだ。これは、日本人なら「困り果

11) Mehrabian, A. 1981. *Silent Messages: Implicit Communication of Emotions and Attitudes*. California: Wadsworth.

12) Knapp, M. 1972. *Nonverbal Communication in Human Interactions*. New York: Holt, Rinehart & Winston.

てでどうしたらいいかわからない」ときに浮かべる表情だと理解できるが、欧米人には理解しがたい表情である。

また、対人距離では、日本人は欧米人より距離をとるのが一般的なので、堅苦しいとか友好的でないという印象を与えてしまう。日本はお辞儀の文化であって、握手の文化でないので、対話するときの人と人の間の空間が欧米より少し大きい。反対に欧米人の対人距離は日本人にとっては近すぎて、圧迫感を感じてしまう¹³⁾。

堅苦しいという印象は、お辞儀の挨拶が与えている場合が多い。韓国とタイの人々を除いて、アジアの国々では圧倒的に握手の挨拶である。中国ではお辞儀は皇帝がいたころの挨拶と思われていて、昔の身分制度を思い出させるようだ。日本人中年女性によく見られるお辞儀の繰り返しは、欧米人や中国人に非常に卑屈な印象を与える。日本の職場や学校で正しいとされている姿勢や身振り手振りも、欧米人には堅苦しいとか緊張しているという印象を与えるようだ。例えば、日本では、面接試験を受けるとき、椅子の背もたれに背をつけないで座るように指導されるが、アメリカではゆったりとリラックスした座り方をするようにアドバイスされる。

(非言語のグループ・エクササイズを行う)

4. 価値観の多様性

今まで見てきた言語および非言語コミュニケーションの違いの基礎にあるのは、それぞれの文化の価値観の違いである。価値観とは文化集団の成員が大切だと認識し共有し、守ろうとする物の見方、考え方、行動の決まりなどであるといえよう。もちろん、どの文化集団においても価値の守り方には個人の性格、生き立ちなどで個人差がある。

以下の質問にあなたはどちらの答えを選びますか。

- (1) 期末テストはレポートにしてほしいのだが、クラスの大半が試験をしてほしいと言ったので、そのように決まった。あなたは
 - ①レポートにすべきだと主張し続け、説得しようと努力する。
 - ②しぶしぶあきらめて、試験をすることを受け入れる。
- (2) 複数のグループ・プロジェクトの評価の結果、あなたのグループのA君が特に優秀だったと表彰された。あなたは
 - ①グループが賞をもらうべきで、A君一人が表彰されるのはおかしいと思う。
 - ②グループでやったプロジェクトでも秀でた人が表彰されて当然だと思う。

価値観の研究は多岐にわたるが、その中でもホフステードやトリアンデスの集団主義と個人主義の研究がよく知られている¹⁴⁾。集団主義とは人間は集団の中にあっ

13) Hall, E. 1966. *The Hidden Dimension*. New York: Doubleday and Company.

14) Hofstede, G. 1980. *Cultures and Organizations*. Beverly Hills: Sage Publications.

て、はじめて人間となるという考え方である。個人主義とは人間は個人として確立していることが最も大切であるという考え方である。日本や韓国では個人の目的よりも集団の目的を重視し、アメリカ、イギリス、オーストラリアなどでは集団の目的よりも個人の目的を重視する。

集団主義の文化では「和」が大切で、「和」を乱すことは極力避ける。集団の秩序を重んじ、互いに相手への思いやりと配慮を重視し、自己主張を控える。らせん的な話し方や飛び石的な話し方、お辞儀の挨拶は、相手への配慮の表れである。

個人主義の文化では自己の考えと言動が一致していることを重視する。従って、自分に正直であることが大切で、相手と考えが異なる場合は容易に相手の考えに合わせないで、堂々と自己主張する。和を乱すことを気にしないで「自分に正直である」ことを大切にする。直線的で石畳的なコミュニケーション・スタイルは個人主義的な価値観を反映している。また、個人と個人は基本的には平等であると考えるので、挨拶行動でも極力上下の差を感じさせない握手を好む。

集団主義と個人主義という価値観の違いから生じる行動の違いは、意思決定の方法、問題解決の方法、リーダーシップのとり方の違いなどにもみられる¹⁵⁾。

(ケース・スタディ 1 を用いて価値観の多様性に気付く)

5. 国際理解への態度

以上、異なる文化集団が共存する国際社会では、多様な言語コミュニケーション、非言語コミュニケーション、価値観が共存することを学んできた。しかし、これらの事柄を知識として知っているだけでは国際社会で生きていくことは出来ない。異なる文化背景の人々と共に働き、共に生活していくためには、実践行動につながる態度を持つ必要がある¹⁶⁾。その態度を育む第一歩は地球上にはいろいろな文化があることを認識することである。そして、それぞれの文化には優劣はなく、長い歴史を通してそれぞれの集団の必要に合ったものに作り上げられてきていること、それぞれ尊重されなければならないことを認めよう。

次に大切なことは、異なる文化に対してオープンな心を持ち、積極的に知ろうとすることである。自分の文化にしか関心がない人は異なる文化の人と建設的な人間関係を築いていくことができない。知らないことには好奇心を持って、もっと知ろうとすることが大切だ。

このとき注意しなければならないのは、自分の文化と比べて、異なる文化は正しいとか間違っているとか、良いとか悪いとか、安易に価値判断をしまいがちであることだ。私達は自分の知らないものに違和感を持つので、正確な判断を下せな

Triandis, H. 1995. *Individualism and Collectivism*. Boulder: Westview Press.

15) Ting-Toomey, S. 1999. *Communicating Across Cultures*. New York: The Guilford Press.

鈴木有香『交渉とメディアーション』三修社、2004。

16) 八代京子、荒木晶子、樋口容視子、山本志都、コミサロフ喜美『異文化コミュニケーション・ワークブック』三修社、2001。

八代京子、山本喜久江『多文化社会の人間関係力』三修社、2007。

い。過大評価したり、過小評価してしまう傾向がある。従って、分からないことに関しては判断を保留する習慣を身につける必要がある。そして、より正確により詳しく相手の文化を知ろうと情報を集めたり、経験を積んだりする努力をしよう。

さらにもう1点、感情をコントロールすることを学ぼう¹⁷⁾。先にも述べたが私たちは自分と似ていないものには違和感を持つので、自動的に不安や恐れ、ひどいときには嫌悪や恐怖を感じる。反対にあこがれや崇拜の念を持つことがある。これらの感情は動物としての人間が生存するために不可欠な感情である。しかし、異なる文化背景の人々と共に生きていくには、これらの感情をコントロールし理性的で合理的な判断と行動が取れるように精神と頭脳と言動を訓練をする必要がある。

文化背景が異なっても同じ人間であるから、共有できるものも多い。私たちにとって平和、安心、信頼は大切である。命を大切にするとか、人を愛する、育む、助けるなど共感できることは多い。喜怒哀楽の感情も共有している。相手の立場に立って共感できる。この共感力は態度の大切な要素である。

このように異なる考え方ややり方を理解し尊重しようと努力し行動することが国際理解への態度である。

以上、見てきたように、国際社会で良い人間関係を築き、共に建設的な生活をおくるためには異文化コミュニケーション能力と国際理解の実践が不可欠であることが理解できたであろう。

演習問題

1. あなたはどんなときに異文化を感じますか。それはなぜですか。
2. 世界の人々が同じことばでコミュニケーションするようになれば、誤解や摩擦は減ると思いますか。
3. 非言語コミュニケーションはなぜ大切なのでしょう。
4. 考え方の違いにより相手と衝突したことがあるでしょう。具体的にどのような点があったのか分析してみましょう。
5. 異文化理解の態度にはどのような資質が大切ですか。リストにしてみましょう。

* 八代京子 麗澤大学経済学部および同大学院言語教育研究科英語専攻教授、異文化間教育学会理事、異文化コミュニケーション学会シニア・フェロー、International Academy of Intercultural Research Fellow, Society of Intercultural Education Training and Research Global Council Member. 専攻：異文化コミュニケーション、社会言語学、英語教育。主な著書：『日本のバイリンガリズム』研究社、1991年、『異文化トレーニング』三修社、1998年、『異文化コミュニケーション・ワークブック』三修社、2001年、『多文化社会の人間関係力』三修社、2007年、『Beyond Boundaries』Pearson Longman Kirihara, 2008. (いずれも共著)

17) マツモト・デヴィッド『日本人の国際適応力』本の友社、1999.

Brislin, R. & Yoshida, T. 1994. *Intercultural Communication Training: An Introduction*. Thousand Oaks: Sage Publications.

ワークシート 1

4人1組になって、互いの共通点と相違点をそれぞれ15点リストアップしてみよう。
積極的にコミュニケーションをとり、制限時間内に作業を終了しましょう。

共通点	相違点
1 _____	1 _____
2 _____	2 _____
3 _____	3 _____
4 _____	4 _____
5 _____	5 _____
6 _____	6 _____
7 _____	7 _____
8 _____	8 _____
9 _____	9 _____
10 _____	10 _____
11 _____	11 _____
12 _____	12 _____
13 _____	13 _____
14 _____	14 _____
15 _____	15 _____

ワークシート 2

次のコメントに対する賛成意見と反対意見を書いてみましょう。理由を4点あげてください。

①暖房器具は電気のほうがガスより良い。

賛成

1.

2.

3.

4.

反対

1.

2.

3.

4.

②国際的に通用するコミュニケーション能力を養うには、英語、英語と言う前に日本語で論理的に話せる力を付けるべきである。

賛成

1.

2.

3.

4.

反対

1.

2.

3.

4.

ケース・スタディ

或る物語

あるところにドナという20歳そこそこの娘がいました。ドナはペーターという若者と婚約していました。ドナが住んでいる村とペーターの村は河で遮られています。その河は普通の河よりも深く、流れも速く、しかも獰猛なワニの棲む河でした。

ドナはなんとかして、この河を渡ろうと思案していましたが、船を持っているエドワードという男を思い出しました。ドナはエドワードに向こう岸まで連れて行ってくれないかと頼みました。エドワードはこう答えました。「一晩一緒に過ごしてくれば連れて行ってやってもいいよ。」エドワードの申し出にびっくりしたドナは母親に相談しました。ドナに向って母親はこう言いました。「ドナ、お前の悩みは解ります。でも、これはお前の問題なのだから、自分で決めなさい。」ドナはとうとう決心し、エドワードに会いに行き、一晩彼と過ごしました。翌朝、エドワードはドナを連れて河を渡りました。

こうしてドナとペーターは暖かく再会できました。しかし、明日は結婚式、という晩になって、ドナはこらえきれずに、どうやって河を渡ることができたのかペーターに話してしまいました。話を聞いたペーターはこう答えました。「たとえお前がこの世で最後の女性だとしても、私は結婚しようとは思いません。」

ペーターに見放されてしまったドナはなすすべもありませんでした。そこへ、シャルルという男がやってきました。道端で泣いているドナを見掛け、どうしたのかと尋ねました。ドナの話を聞いた後で、シャルルはこう言いました。「君のことは愛してはいないけど、結婚してあげよう。私についてきなさい。」

この話に出てくる5人の登場人物（ドナ、ペーター、エドワード、母親、シャルル）を、賛同できる順に下記に並べてください。なぜその順番にしたのか理由を説明できるようにしておいてください。

1. _____
2. _____
3. _____
4. _____
5. _____